

11 徳島の中心市街地はどこですか

●中心地とは変遷するもの

徳島の政治や経済の中心地は、古代は朝廷の出先機関が置かれた徳島市国府町、中世では戦国大名が拠点とした藍住町勝瑞、近世からは蜂須賀家の居城である徳島城周辺へと、時代とともに変遷してきました。江戸時代に城下町であった徳島市は、当時の姿を大工町や藍場浜、弓町、幟町といった多くの地名に残しています。

徳島城の築城と同時に多くの商人達も集められたのですが、まずお城に近い内町地区には、城に品物を納める御用商人が多く集まりました。城から見て川向こうにも商売を行う店が集まり、新町となりました。新町や船場には大きな店が多く、藍場浜には藍大尽だいきんと言われた藍の豪商の白壁の藍倉倉庫群が立ち並んでいました。城の裏鬼門である南西の方角に位置する眉山の麓には、寺社が集まり、寺町を形成しました。

●交通は水運から陸運へ



現代の輸送手段は自動車や鉄道などの陸運が中心であり、徳島を流れる河川の多さは時代として交通渋滞を引き起こす要因となっています。しかし、自動車や鉄道などが無かった時代では輸送手段の中心は水運であり、水都である徳島市に人口が集積しました。

水運全盛期の吉野川では、大きな帆を張った全長16メートルの船が、薪、木炭、煙草、藍玉などを、祖谷川口の川崎から池田く辻く半田く脇町く岩津く川島く第十堰を経て徳島市まで2く3日で運びました。逆に徳島から池田へは、塩、米麦、雑貨などを積んでおよそ1週間を要しました。

那賀川はダムができる1951年まで、那賀奥で伐り出された木材の運搬に利用されてきました。途中までは管流くだしといって1本ずつ流し、集積場で筏いかだに組み下流の製材工場まで流していました。

昭和の初めごろまでは、徳島市街地と撫養むや（現鳴門市）を結ぶ巡航船も運航されていました。新町橋畔く古川く吉野川を横切り、榎瀬江湖川から今切川を下り、旧吉野川く撫養川く鳴門文明橋畔に至るものです。

1895（明治28）年に日清戦争が終了した後、深刻な財政難に陥っていた政府は鉄道などの大型事業に民間の資本を導入しようと考えました。徳島でも藍商人の大串龍太郎が県内の有力藍商人らに働きかけて、1896（明治29）年に徳島鉄道（株）が設立され

ました。それから3年後の1899（明治32）年2月に徳島〜鴨島間が開通し、その翌年には船戸（川田）まで開通しました。そして、1907（明治40）年に国に買収された後、1914（大正3）年3月に阿波池田まで開通しました。

1913（大正2）年には徳島〜小松島間が、1916（大正5）年には古川〜撫養間と中田〜古庄間がいずれも民営で開通し、1935（昭和10）年には高德線が国有として開通しています。

鉄道の開通とともに、藩政時代から明治期にかけて物資輸送の中心であった吉野川の水運は、その地位を鉄道に譲ることになりました。

●内町・新町地区の栄枯盛衰

大正時代に鉄道網の発達によって県内各地から徳島駅に人を運ぶ仕組みが整い、特に内町地区と新町地区は、戦前、西日本でも有数の商店街になっていました。しかし、太平洋戦争末期の1945年7月4日、徳島大空襲によって徳島市の中心部はもとより、市街地の6割が一晩で焼け野原となりました。このときの被害は、死者約1千人、負傷者約2千人、焼け出された被災者約7万人という大きなものでした。

こうした悲惨な出来事を乗り越え、終戦後は驚異的な復興を遂げ、1950年代半ば

1970年代初頭の高度経済成長期には、新町地区周辺に多くの映画館が立ち並び商店街を多くの人が行き交い、買物を楽しんでいました。

しかし、交通の主役は次第に鉄道からマイカーに移り、1980年代には広い駐車場を備えた郊外型大規模店が相次いでオープンし、賑わいに陰りが出てきました。1983年に徳島駅前には徳島そごうが開店し、この年の新町地区の通行量は10年前の半分以下にまで落ち込み、そして、1995年には同地区の顔とも言える地元資本の丸新百貨店が60年余りの歴史に終止符を打ち、ひとつの時代が終わりました。

●中心市街地の役割とは何でしょうか

そもそも中心市街地とは何でしょうか。ひと言で表現すると「都市機能が集積し、外から人が一番多く集まってくる場所」。具体的には、①公共交通のターミナル、②消費、娯楽の空間、③医療、文化、教育などのサービスを受けられる空間、④オフィス、⑤住居が組み合わさった空間で、歩いて回れる範囲を指します。

徳島市の中心市街地は、人が出会い、交流し、新しい文化を生む街としての求心力が残念ながら失われています。中心市街地のもつ交通条件の良さや人口密度の高さといったメリットを生かし、人が集まり人が主役となるような街へ転換を急ぐ必要があります。

多くの人のニーズを反映させ、足りない機能を付け加えていくことが重要です。そのためには街全体をデザインしてマネジメントする仕組みが欠かせません。そこで、中心市街地活性化に取り組んでいる高松市中心部の丸亀町商店街の例をみましょう。

ここでは中心市街地の活性化について、「商店主の生活設計のためだけの事業であってはならない。商店街は公共性を意識してこそ存在価値がある」という考えで取り組みがスタートしました。

まちづくりを進めるうえでのネックは土地問題です。シャッターの降りた店を放置しようが駐車場にしようが、土地の所有者の自由です。そこで、丸亀町商店街は土地の所有権と使用権を分離させました。所有者は自分たちの資産である土地をまちづくり会社に提供し、まちづくり会社はその地域に必要なお店や施設を集積し、そこから得られる利益をオーナーに地代として分配するという仕組みを作り上げたのです。

これが実現したのは、地域に住む人たちの強い危機感と日ごろの連携、リーダーシップをもった人の存在があったからこそ。徳島も大いに参考にすべきでしょう。

郊外の大型ショッピングセンター（SC）を中心とする地域が中心市街地の機能を果たせばいいではないか、との意見もあります。SCは買物客のニーズに合った店を揃え、最近では消費だけでなく学びの場や子育て支援サービスも提供し、地元の人をたくさん雇

用するなど、大きな役割を果たしています。しかし、SCだけでは全国どこにでもある特徴のない街になってしまいます。

中心市街地には住む人と訪れる人が共に長い歴史の中で作り上げてきた「街並み」があります。徳島のアイデンティティ（存在意義）とも言える徳島ならではの街並みが衰退することは、県全体の活力低下にもつながります。ですから、行政やそこに住む住民のみならず、市民・県民が自分たちの問題として主体的に関わり、中心市街地を再構築していくことが必要です。

●心おどる水都徳島に

徳島市の中心部は、空から眺めると、川に囲まれた地域がひょうたんの形をしているこ



ひょうたん島クルーズ

とから、「ひょうたん島」の愛称で呼ばれています。徳島市は、川が面積の約13%を占めています。が、「ひょうたん島」の周囲の護岸は県名産の青石できれいに整備されています。世界に誇れる水の都といっても過言ではないでしょう。

ところが、1980年代頃までは、新町川も決してきれいな川ではありませんでした。そこで「できる人が、できる時に、できることを」を基本に、「市民の汚した川は市民の手できれいに再生しよう」と立ち上がったのが、現在NPO法人・新町川を守る会の理事長を務める中村英雄さんです。有志10人で会を発足し、毎月2回ボートで川の清掃を始めました。中村さんたちの活動を行政も後押しし、魚釣りができるほどきれいな川が復活したのです。

守る会は、ひょうたん島を約30分で1周する「ひょうたん島クルーズ」を無料（要保険料2000円）で運航していますが、今や徳島市の名物となり、年間の乗船者は5万人に迫る勢いです。そして、毎年夏に「吉野川フェスティバル」や「屋形船と邦楽の夕べ」、秋には「観月演奏会」、冬には「川からサンタがやってくる」「寒中水泳大会」など、川を活かすさまざまなイベントを開催し、さらには、新町と鳴門を結ぶ「撫養航路」を復活させるなど、川を楽しむライフスタイルを定着させてきました。

そのほかにも、活動の起点となった新町川はもちろん、助任川、田宮川、吉野川河川敷

の清掃、花植え、そして、高知県の吉野川源流域での植樹・間伐活動に加えて、川を共通項とした全国各地との連携などにも力を注いでいます。

「川を汚したのも人間なら、川を美しくするのも人間。川は見られて美しくなる」というのが、中村さんの持論です。

